大正八年一月二九日の柳田國男

―全集「柳田國男年譜」補遺―

竹居明男

これまで公にされた柳田國男年譜の類は数多いが、近年刊行された『柳田國男全集』別巻1（二〇一九年、筑摩書房刊）の大部分を占める「柳田國男年譜」（以下「年譜」と略称）は、編集委員小田富英氏の手になる労作で、現段階で最も詳細な年譜である。刊行直後に、私も大変興味深く通読した。

ところで最近、たまたま佐佐木信綱著『明治文学の片影』（一九三四年、中央公論社刊。本文三〇〇頁余。装幀は小村雪岱）を繙読していたところ、「年譜」には見えない、表記の日付の柳田國男の動向が目に入ったので簡潔ながら報告したい。

歌人・国文学者佐佐木信綱（一八七二～一九六三。第一回文化勲章受章者）の多大なる業績については今更述べるまでもないが、その二百数十点にのぼる膨大なる著書・編著の中で『明治文学の片影』はやや異色である。父親弘綱（一八二八～九一）も国学者・歌人として著名であったが、主宰した短歌結社「竹柏会」を中心として、親交やゆかりのあった人物（項目名で一〇〇人）の書簡類の飜刻、および筆跡類の写真に、著者の「思い出」や人物評等を添えたのが該書である。

中で「正岡子規君」「石川啄木君」「島村抱月君」などの表記が出てくるのは、おのずから著者の時代と位置を反映しているが、今一つ、掲載人物が、書名から想像されるような「文学」に限らず、歴史・哲学・国文学等を含む明治・大正の学芸全般に及んでおり、実に多彩なる人物に関するまことに臨場感に富んだ「芸林秘史」（巻末広告の表現）と言えよう。

さて、その中の「徳川頼倫侯」の項（二一五～六頁）に、「紅葉館の雅会」と題して、大正八（一九一九）年一月二九日の夜、南葵文庫創設者の旧紀州藩主徳川頼倫侯を主賓、著者を陪賓とする「雅会」が芝公園（現港区内）の料亭紅葉館で催された（旧紀州藩士の下村宏主催）記事がある。

そして「主客共に談論風発であった」その席上、頼倫侯は「もみぢ葉のあかき心のともしびの光をうけてつどふ歌人」と短冊にしたためたが、もう一枚の短冊には、「大正八年一月廿九日の夜／紅葉館に集まれる人々」（以上は佐佐木信綱の執筆か）の下に、同会の出席者が署名した（写真は『明治文学の片影』より転載）。同書の記載によると「頼倫、邦輔（岡崎翁）、潜（永井博士）、兵治（二上博士）、次郎（田中氏）、柳國（柳田國男君）、八十八峰（米山梅吉君）、ひろし（下村君）、弟彦（間島君）、犀水（加藤正治博士）、英一（牧野博士）」であった。これら出席者の一人一人について、またこの会合の意味等については後日にゆだねるとして、さしあたり注目されるのが、その中に柳田國男の名があることである。

この時、柳田國男は満四三歳で、貴族院書記官長の任にあり（この年の末に退任）、その一〇年ほど前には著名な『後狩詞記』『石神問答』『遠野物語』等を刊行していた。「年譜」の大正八年一月の項（一二三頁）には、この日付は無く、その前後の一月二七日に第四回『同人』の小集会（於丸の内中央亭）への出席、また一月三〇日に四女千津誕生の記事があるのみである。

以上、事実の報告のみであるが、今回新たに「年譜」の大正八年条に

一月二九日　芝公園内の紅葉館に開催された、徳川頼倫侯を主賓とする「雅会」に出席し、短冊に署名する。

というような一項（文章は私案）が追加されるべきことを提言したい。

もとより、こうした提言が可能なのも「年譜」の存在ゆえである。今回の労作に改めて敬意を表しつつ、とりあえずの報告にとどめる。

（同志社大学名誉教授）